

日蓮聖人御墓考

奥野本洋

はじめに

日蓮聖人身延在山九ヶ年の後、身延から池上へむかわれ、その地でご遷化、ご遺言をもとに、身延山に埋葬されたが、その御墓はどのようなものであり、今日迄伝わってきたのであろうか。

一、

日蓮聖人は、ご遺文中に、

いづくにて死候とも墓をばみのぶ沢にせさせ候べく候。⁽¹⁾

又、

此度はのがれがたく候へば、墓所のごとは身延ノ沢にたてさせ玉へと、かたくをのをのへも申候。⁽²⁾

と述べられ、ご自身が亡き後は、日蓮聖人の墓を中心に門弟が団結し、広宣流布を続けていってくださる事を望んでいたと思われる。

『元祖化道記』⁽³⁾並びに『註画讃』⁽⁴⁾によれば、日蓮聖人がご臨終間近になり、日朗以下の長老に対し、自分が化した

日蓮聖人御墓考（奥野）

後は、全身を瓶におさめて身延山に送ってほしい旨を告げられるが、一日半日の道ならば仰せの如くに致しますが、三日四日の道のり、何が起るかわかりませんと大聖人に申され、お骨にして身延山へ葬るべきむねを述べられたとある。

又、『元祖化導記』には、或記ニ云として、「御身骨ヲハ御遺言ニ任テ十月二十一日池上を出発」⁽⁵⁾とあり、同様に、『註画讃』⁽⁶⁾にも二十一日出発となっているが、日位の『大聖人御葬送日記』には、「御遷化御舍利ハ同月十九日池上御立チ有リ」⁽⁷⁾とハッキリあり、十九日に池上を出発されたと見るべきであろう。⁽⁸⁾

又、同じく『化導記』には、「同十月二十九日御ソ木ヲ取り、御影像建立在之、一百ヶ日御墓立了、躰テ御舍利奉納等、云云。」⁽⁹⁾とあり、弘安六年の正月に墓がつくられ、百ヶ日の法要が営まれたものと思われる。この他に智寂省師の『本化別頭高祖伝』には、「二七日仮設三宝塔、伸三之供養……十二月二日七七七七日設三送葬礼」⁽¹⁰⁾と記録され、『化導記』には記されていない仮の宝塔との表現が見られる。『註画讃』には「二百箇日ニ起レ廟、納レ骨」⁽¹¹⁾とあり、墓、宝塔とも異なる廟の表現がなされている。さらに日潮の『別頭統紀』中には、「我本師世尊者築二廟於靈鷲山、日蓮留三塚於身延山」⁽¹²⁾とあり、ここでは釈尊の墓を廟と呼び、日蓮のそれを塚と称している。同じ『別頭統紀』には、阿仏房の墓について、「盛綱築三之塚墳」⁽¹³⁾と表現、塚という表現は智寂省師も「日蓮者留三塚於身延山」⁽¹⁴⁾といひあらわしている。円智日性の『元祖蓮公薩埵略伝』にも、「令レ鎮三師墳塚」⁽¹⁵⁾と塚の字が見られるのである。これらは、その時代によって墓の形体に幾分ちがいがあったか、ただ呼称にちがいがあったかであるが、いずれも墓所にちがいはなかった。

大聖人滅後七百年の今日、身延山久遠寺山内に廟所があるのだが、廟所即ち久遠寺の考え方はなくなっている。聖人が身延山に埋葬された当初は、「御墓へ御入堂候はん事……」⁽¹⁶⁾とあるように、御墓がそのまま久遠寺との考え方があったようである。『宗祖御遷化記録』には、御所持仏教事として「御遺言云仏者^{立像}墓所^可ニ立置^云」⁽¹⁷⁾「同籠^置墓所^傍」⁽¹⁸⁾とあることから、「同籠置墓所傍」のこの傍は誤読であると指摘している。⁽¹⁹⁾即ち久遠寺が墓所の寺であり、「御墓へ御入堂」とは久遠寺に参詣するということであつた。そして又、この墓を上足六人他の僧によって輪番する制度が設けられるのだが、各々が各地への教線拡充の事や幕府の弾圧が始まる等の問題もあり、永くは続かなかつた。⁽²⁰⁾興師が美作房にあてた手紙には、「身延沢之御墓之荒はて候て、鹿かせぎの蹄に親子懸らせ給候事も当られぬ事に候」⁽²¹⁾とあり、三回忌の頃には登山する者も少なくなり、宗祖の墓が守られていない様子を歎かれています。この事から推察するに、墓のそばに『日蓮教団全史』にいわれる塔頭⁽²²⁾というべき寺はあつても、墓にはその墓石を覆うような建物は何もなく、墓石あるいは塔のみの塚であつたらう。

日道の『日興上人御伝草案』には、「日興上人ハ大聖御遷化之後身延山ニテ弘法ヲイタクケ^{公家}関東ノソウモンヲナシテ、三ヶ年が間身延山ニ御住アリ」⁽²⁴⁾と三ヶ年間住まわれたという表現と、『從開山日順法門』には「身延山ニハ日蓮聖人九年、其後日興上人六年御座有リ、聖人御存生ノ間ハ御堂無シ御滅後ニ聖人御房ヲ御堂ニ日興上人ノ御計造玉御影ヲ造ラセ玉フ事モ日興上人ノ御建立也」⁽²⁵⁾とあり、三年と六年とのちがいが述べられている。日興が身延を離れ

るのは、宗祖七回忌後の正応元年（弘安十一年改元）十二月であるから、弘安八年の終り頃から三年の常任と考えられる。⁽²⁷⁾ 日順の六年と考えると、自身が常住しているにもかかわらず墓の荒はてている事を歎かれるハズが無いであろうから矛盾を感じるのである。そして『蓮公行状年譜』（豊臣義俊）に「如⁽²⁸⁾此相定りて御墓所、勤仕おこたりなく、祖師の御遺法を守たてまつりし処、祖師七回忌の御時興師の輪番也、実長入道日円故あって興師を廢し、日向聖人を常貫主として巡番の法式破て……」⁽²⁸⁾とあるように、輪番は事実上、行なわれていなかったが、この時にこの制度は無くなるのである。⁽²⁹⁾その後、富士門流においては、大石寺所伝の興師の灰骨奉持等の問題も出てくるのである。又、中山でも和泉公日法が宗祖池上茶毘之庭にて御舍利三粒を中山法華堂に持ち帰ったという日忍の「大聖人御舍利分与事」が伝えられている。⁽³¹⁾昭和十年発行樓神21号には、室住一妙先生が、新発見の聖伝資料として、『日進聖人仰之趣』⁽³²⁾が紹介され取り上げられているが、その中には、宗祖入滅の後に衛門大夫が、宗祖入御の地が池上であるということから、宗祖の御骨を池上に安置し墓をも立てようと申し出たが、六老僧が宗祖の遺言を盾に一步も譲らなかったという説が述べられている。この事は、身延文庫蔵古写本によって知られる事で、今迄ふれられてない事である。

三、

その後、御墓についての記録は、中山三世の日祐の『善根記』⁽³³⁾に、「去年康永元年^{壬午}卯月三日、六浦ヲ立、同七日登山同八日御塔頭柱立奉^レ拜^レ之^下向、大聖人御舍利奉^レ拜^レ」とあり、身延三世日進の時に、宗祖の御遺骨を奉安する場所の柱立てが行なわれ、日祐はその時に大聖人の御真骨を拜している。⁽³⁴⁾

日興が御影堂を建立されてから日進が塔頭柱立をする迄の約五十年間墓所に関する記録はないが、潮師の『別頭

統紀⁽³⁵⁾中に日像上人が永仁二年（一二九四年）「詣^レ身延山^ニ拜^ニ祖塔^一七晝夜」と書き残している。この時の祖塔とは、六老僧によって葬られたままの墓所であったと思われる。

日進上人が建てられた塔頭がその後どうであったかの記録を見ることが出来ぬが、村松海長寺日海の記録によれば「日海十六春登^ニ身延山^ニ住^ニ云、霜月^ハ中下付、仍^レ午年地震於^ニ身延山^ニ值^ニ云、身延山事大聖人御草創之諸堂地、悉捐滅成^ニ河原^ニ早、日朝聖人御建立之御塔類落、坊中悉流失^レ、今之御堂地日朝聖人再興開興之山也⁽³⁶⁾」とあり、この明応七年の大地震⁽³⁷⁾によって日進の建てられた塔頭等は流されたと思われる。しかし大聖人のご真骨は、日朝の手によって、新しい堂地に移され二重宝塔⁽³⁸⁾に安置されていて無事であったと思われるが、この宝塔も崩壊⁽³⁹⁾している。祖滅二一七⁽⁴⁰⁾年朝師七十七才であり、諸堂再興等の思いを胸にかばかりの悲しみであったであろう。

その後十三世日伝師代に祖師堂が建立されるが、祖師廟堂の建立は、第十七世日新の代迄待たれるのである。この事は遠沾亨師の『諸堂記』に「二間半八角也⁽⁴¹⁾」と記録されている。さらに同記録に、二十二世日遠代に、「祖師聖人石廟從^ニ堂地上^ニ奉^レ移^ニ此塔頭^一靈地^ニ以^レ次修^ニ理八角堂^一者也」とあり、日朝師の代に大聖人草創の地から朝師開興の地へと移されていた廟が、八角堂を修理する間、もとの塔頭の靈地へと移されている事がわかるのである。又、この頃養珠院によって三間半四方の宝蔵が建立されているが、ご真骨が宝蔵に安置されていたか石廟に納められていたかは定かでないが、二十五代深師代に「御靈骨^ニ宝瓶^一并塔、深師代入用三百五十目⁽⁴²⁾（深師有^レ之⁽⁴³⁾）」とある事から日新代につくられた靈骨宝瓶を新しくし靈骨を奉安されていたと見るならば塔頭靈地に移された石廟⁽⁴⁴⁾は墓だけであったと思われる。

四、

三十三世日亨師代に、「為^レ防^レ雨^レ湿^レ、悉^レ為^レ油^レ丹^レ塗^レ」⁽⁴⁶⁾としてゐる廟には、古くは阿仏房の墓⁽⁴⁶⁾や富木入道の母の墓⁽⁴⁷⁾があつた事は知られるが、その他、宗祖の御側に葬られたらうという信者や町方の墓が建立されてゐたと思われ⁽⁴⁸⁾る。遠沾亭師は「凡人ノ骨ハ可^レ送^レ取^レ骨^レ堂^レ永代不^レ可^レ破^レ此^レ式^レ」と定められ、一時は靈地としての祖廟域が形成されたようである。しかし、亨師のこの定めも後には破られてゐた事がわかる⁽⁴⁹⁾。又、遠沾亭師の諸堂記の中に、覚林房十六世の一行院日俊が令法久住祖恩報謝の為に無尺財を取め永代毎日廟前に於て妙典一部を説誦せしむとの記録が残つてゐる⁽⁵⁰⁾。一行院日俊は、今も現存する高座石の唐金の灯籠の功德主の中にもその名が見られるが、時は元禄十四年（一七〇一年）九月二日、三十二世智寂省師の時代にあつてゐる。

遠沾亭師の後、三十六世日潮代には、御廟一式の立替が行なわれ⁽⁵¹⁾、松木祖像をこのところに移してゐる。さらに時代は進み、文政四年（一八二一年）八月九日、五十五世日暹代、火災により御廟八角堂及拝殿を焼失⁽⁵²⁾、翌十月十三日に再建成就するも再び同七年八月二十七日の火災により焼失してしまつた。さらに追い打ちをかける様に、文政十二年九月六日五重塔より出火し真骨堂はじめ二十八棟の伽藍堂宇を灰燼に帰してしまふのであるが、天保二年（一八三一年）五十八世日環代、宗祖五百五十遠忌を厳修すると同時に、御真骨宝蔵を上棟してゐる⁽⁵³⁾。その後幾多の変遷を経て、明治八年（一八七五年）一月十日七十三世日薩代、再び諸堂残らず類焼するも、同年三月二十三日、土蔵八角四方の御真骨宝蔵が建立されている。そして明治九年、清水房書院を元真骨堂宝蔵の地へ移して奥書院（水鳴楼）としてゐるとあることから⁽⁵⁴⁾、真骨宝蔵の位置は、一時期現水鳴楼の場所にあつた事が知られるのである。

先師の書き残された記録より、宗祖廟塔、真骨堂の変遷を追ってみたが、不十分な考察に終っており今後の課題とするところである。大石寺堀日亨師の『興師身延離山史』の巻末に、「朝師化導記の中に、ことさら御身骨を残らず身延山に納めたとの由が書き残されているのは、その時代各山不和の際に、身延に御身骨無しとの流言等があり、その為念記したとするならば云……」とあり、それならば、「はたして御正墓といえるや否や」との論もあるが、そのような問題は無用であり、大聖人遺言の如く、日蓮聖人の御魂は身延山に棲むのであり、全門流がそのシンボルでもある御墓をもとにして登山参詣し、一丸となって正法流布につとめなければならないと思う次第である。

今回の御墓考は、自坊田代高座石との何らかの関わりについて考えてみようとするのが当初の出発点であったが、特定の場所云ではなく、御墓は身延沢即ち九ヶ年間心安く法華経を説誦された身延山であればよいと思えるのである。

〔註〕

- (1) 「波木井殿御報」 定遺一九二四頁
- (2) 「本寺参詣鈔」 定遺二一七一頁
- (3) 『日蓮上人伝記集』中「元祖化導記下」四七頁
 「或記云、御終焉近ナテ、日朗以下老僧違対被レ仰ケルハ、我死ナラハ全身瓶奉納其體身延山送可レ置之、云云 日朗被レ申ケルハ、一日半日間ナラハ如レ仰可レ有之歟、既三日四日路次伝野臥山臥様、難ニ届申……………」
- (4) 『日蓮上人伝記集』中「註画讃卷五」一〇七頁。『化導記』と同じような表現が見られる。
- (5) 『日蓮上人伝記集』中「元祖化導記下」四八頁

日蓮聖人御墓考（奥野）

日蓮聖人御墓考（奥野）

- (6) 『日蓮上人伝記集』中「註画讃卷五」一一〇頁。
 (7) 『宗全』一卷五七頁。
 (8) 『日蓮教団全史』上五一頁。
 (9) 『日蓮上人伝記集』中「元祖化導記下」四八頁。
 (10) 『日蓮上人伝記集』中「本化別頭高祖伝下」五二頁。
 (11) 『日蓮上人伝記集』中「註画讃卷五」一一〇頁。
 (12) 『別頭統紀』卷八 一八七頁。
 (13) 同一七〇頁。
 (14) 『日蓮上人伝記集』中「本化別頭高祖伝下」五〇頁。
 (15) 『日蓮上人伝記集』中「元祖蓮公薩埵略伝」七頁。
 (16) 『宗全』二卷「美作房御返事」一四六頁。
 (17) 『宗全』二卷「宗祖御遷化記録」一〇五頁。
 (18) 『宗全』本門宗部四七八頁。
 (19) 『日蓮教団全史』上五四頁。
 (20) 同六五頁。
 (21) 『新校群書類従』卷二百七十七「赤染衛門集」中に、「朝ほらけ部をあくとみえつるかせぎの近くたてるなるなり」とあり、かせぎと濁っている。かせぎの意は主に鹿の古称といわれるが、猪のような野生動物を指す場合もある。
- (22) 『宗全』二卷一四五頁。
 (23) 『日蓮教団全史』上五四～五頁。
 (24) 『宗全』二卷二四九頁。
 (25) 『宗全』二卷三八二頁。
 (26) 『日蓮教団全史』上六九頁。
 (27) 同七三頁。
 (28) 『日蓮上人伝記集』中「蓮公行状年譜」三四頁。

(29) 『日蓮教団全史』上七五～八頁

(30) 堀日亨著『日興上人身延離山史』一九九頁

(31) 『宗全』一卷四五一頁

(32) 『棲神』二十一号七～八頁

「聖人御入滅、後衛門大夫義今末法モツキ塔、舍利モツキ塔ナヲ大切事ナレハ幸是入御事ナレハ此ノ御骨、安置申御墓、モツキ塔、モ立申ヘシト云云

其時六人老僧連一同何此聖人御命、違ル、ヲ身延入、入參セヨト御定也ト云云イカニ仰セ候トモ身延入、入參スマシク候……」

(33) 『宗全』一卷四九九頁

(34) 『日蓮教団全史』上一九三頁

(35) 『本化別頭仏祖統紀』卷十 二三八頁

(36) 『宗全』二十三卷「日海記」一六〇頁

(37) 『甲斐叢書』中「妙法寺年録」二七四頁に「明応七年戊午閏月十月なり正月の一日より事の外にあたまかに雪ふらず道吉八月廿五日辰刻に大地震動して日本國中堂塔乃至諸家悉く頽れ落つ大海辺りは皆々波浪に引かれて伊豆の浦へ悉く死失又小河

悉く損失才同月廿八日大雨大風無限申尅当方の西海長浜同大田輪大原悉く壁にをされて人々死る事大半に過へたり……」
とある。又、『統群書類従』中「甲斐国妙法寺記上」二八九頁～二九〇頁にも同じように書かれている。

(38) 『御本尊鑑・遠沾院日亨上人』中「身延山久遠寺諸堂等建立記録」八四頁

(39) 『日蓮教団全史』上一九四頁

(40) 『棲神』五十六号「身延山諸堂記」一八九頁に「一祖師廟堂二間半八角也同拜殿三間半廊下、第十七世日新師代建立、棟札天正十三乙酉日新師形……」とある。

(41) 同一六三頁「高祖御靈骨ノ宝瓶ノ書付ケ 天正十八年庚寅九月日ト有之天正十八年八十七代新師代ナリ」とあり、八角堂が建った後、天正十八年高祖御靈骨の宝瓶がつくられている。

(42) 『日蓮教団全史』上一九四頁、「慶長年中（一六〇〇頃）」とある。

『御本尊鑑』中「諸堂建立記」一一五頁には、「宝蔵三間半四方第二十二世遠師代慶長年中紀伊大納官領立師母堂養珠院初、号、蓮華院、妙紹日心大姉立之此養珠院尼者一宗再興之大檀越也……」とある。

日蓮聖人御墓考（奥野）

日蓮聖人御墓考（奥野）

- (43) 『樓神』五十六号「身延山諸堂記外」一六三頁。
- (44) 同一八九頁、「石廟ノ妙法蓮華經ハ相伝フ向師ノ筆ト」とある。
- (45) 同一八九頁。
- (46) 『千日尼御返事』定遺二七六五頁。『本化別頭仏祖統紀』卷七、一七〇頁。「盛綱樂之塚墳……」とある。
- (47) 『忘持経事』定遺一一五一頁。「御宝前安置母骨……」とある。
- (48) 『樓神』五十六号、一八九頁、「古来以凡人骨収此所汗穢不浄也……」
- (49) 『統身延山史』五頁「祖廟盤整会の事業」のところに詳しく説明されている。同七頁、「翌十四年（一九二五）は移転の実施とその終了の歳で……移転すべき墓石は五千七百余基、墓石所有者は三百六十六戸を数えたという。」とある。
- (50) 『樓神』五十六号「身延山諸堂記外」一八九頁
- (51) 『樓神』五十六号一八九頁妙俊院日寿（鈴木日寿）の追加記録。
- (52) 同頁に、「祖師尊像ハ九老日像菩薩御作」とある。
- (53) 『身延山史』二二〇頁。
- (54) 同二二一頁。「御眞骨宝蔵（二箇半四方）」とある。
- (55) 同二八九頁、「奥書院（十二間四間）」とある。
- (56) 『日興上人身延離山史』二〇一頁。
- (57) 高木豊『日蓮とその門弟』二九二頁「廟所は、没後の門弟の統合のシンボルたることが望まれるものであった。……廟所はついに門弟統合のシンボルたり得なかつた。」

参照文献

執行海秀著『興門教学の研究』

室住一妙著『行学院日朝上人』

林是晋著『身延山諸堂建立考』（樓神五十三号）

早川達道著『富士日興上人身延離山の研究』

塩田義彦著『波木井公一族と身延山』（樓神二十六号）

高木豊著『日蓮—その行動と思想』

塩田義遜著『日蓮聖人の生涯』

身延山久遠寺刊『身延山史年表』

日蓮宗刊『日蓮宗事典』

宮崎英修著『日蓮教団の展開』(講座日蓮—日蓮信仰の歴史)

遠藤是妙著『祖廟中心』(楳神二十二号)

日蓮聖人御墓考 (奥野)